

接触場面における日本語母語話者による「先取り発話」について

—母語話者の接触経験と学習者の日本語能力が及ぼす影響に着目して—

雷 雲恵(文教大学大学院生)

1. はじめに

会話は会話参加者のやり取りによって成立し、話し手が情報を送り、聞き手はその情報を聞いて内容を理解し、反応を示す。堀口(1997)は、コミュニケーションを進めていく上で「聞き手の役割」を重視し、「話し手が話を進めていくためには、聞き手からの反応や働きかけや助けが必要である」(p. 38)と述べ、聞き手の反応として「先取り発話」を取り上げている。会話中に、そのような先行話者の発話に対する次話者の「予測」に基づき、次話者が先取って産出する「先取り発話」がしばしば起こる。接触場面における「先取り発話」については、木林(2011)、笹川(2020)などがあるが、その使用実態に関しては、十分に明らかにされていない。また、日本語教育経験を持たない日本語母語話者(Native Speaker: 以下ではNS)の非母語話者(Non Native Speaker: 以下ではNNS)との接触経験の多寡に注目した柳田(2015)は、接触経験の多いNSがNNSの発話遂行困難を察知した時に先取りして「共同発話」(本研究の「先取り発話」に含まれる)を成立させることを報告しているが、相手のNNSの日本語能力の影響は検討されていない。

そこで、本研究は、日本語教育経験を持たない一般のNSに注目し、接触場面における一般のNSによる「先取り発話」に、NNSとの日常的な接触経験とNNSの日本語能力がどのような影響を及ぼしているか解明することを目的とする。

2. 調査概要及び調査方法

本調査は、調査対象を20代女性の大学生及び大学院生として、2018年4月から2020年4月にかけて行った。調査対象のNSは、日本語教育経験のある者を除外し、親しいNNSの友人がいて日本語によってNNSと日常的に接触する機会があるNSを「接触経験の多いNS」、日本語によるNNSとの会話経験がほとんどなく、日本語で話す親しいNNSの友人がいないNSを「接触経験の少ないNS」として、接触経験の多いNS 8名(以下ではNSE1~NSE8)、接触経験の少ないNS 8名(以下ではNSN1~NSN8)の計16名である。NSの対話相手となるNNSは、上級NNS 16名(以下ではNNSA~NNSH)、初中級NNS 16名(以下ではNNSa~NNSh)の計32名である。調査方法は、NSとNNSの初対面場面を設定し、ロールプレイ方式を採用した。ロールプレイの内容は、NNSが学校の休みを利用して日本観光をしたいと考え、日本人の友人NSに相談しながら二人で行先を決めるというものである。接触経験の多いNS 8名と接触経験の少ないNS 8名それぞれに、上級NNS、初中級NNSと2人1組でロールプレイを行ってもらい、合計32組、約320分の談話資料を収集して、その文字化資料を分析対象とする。

会話における「先取り」という現象については、様々な呼び方が使われてきたが、本研究では、「先取り発話」(堀口 1997)という呼び方を用い、「先行話者の発話が移行適切場所(Transition Relevance Place: TRP)に達する前に、次話者が発話の続きを予測して、理解を表明したり、内容の補完・拡張をしたりして、ターンを取って話者交替を行う時、その先行話者の発話に繋いでいく次話者の発話(必ずしも完結させるとは限らない)」を「先取り発話」と定義する。また、先取りの「発話」に「あいづち」を含めて「先取り発話」として扱うことにする。以下に、本談話資料から「先取り発話」の例を挙げる。

- 203 NNSi でも、人が [[➡「先行話者」/「先行発話」
⇒204 NSE5 [[多い ➡「後行話者」/「先取り発話」
205 NNSi そうです。

このようにして談話資料から取り出したNSのすべての「先取り発話」について、量的、質的に分析することにする。

3. 調査結果

全談話資料から取り出したNSの「先取り発話」について、まず、3.1では、その生起頻度に関して量的に調査した結果を述べる。次に3.2では、「先取り発話」を「情報の帰属」によって分類し、談話分析の手法によって質的に分析した結果を述べる。

3.1 「先取り発話」の生起頻度について

表1は、接触経験の異なるNSによる「先取り発話」の生起数と生起率を示したものである。

この結果について、「接触経験(2水準)×場面(2水準)」の2要因分散分析を行ったところ、接触経験の主効果が見られた($F(1, 14) = 11.722, p < .005$). つまり、接触経験の多いNSは、接触経験の少ないNSより「先取り発話」を多く用いると言える。また、接触経験と場面の交互作用が見られた($F(1, 14) = 4.876, p < .05$). 単純主効果を検討したところ、接触経験の多いNSは、場面による「先取り発話」の生起数に有意差が認められなかったが($F(1, 14) = 0.467, p = 0.5057$), 接触経験の少ないNSは、場面による「先取り発話」の生起数に有意差が認められた($F(1, 14) = 5.952, p < .05$). つまり、接触経験の多いNSは、「先取り発話」の生起数が対上級場面でも対初中級場面でもほぼ同じであるが、接触経験の少ないNSは、対上級場面では対初中級場面より有意に少なくなることが分かった。

表1 「先取り発話」の生起数と生起率

	接触経験の多いNS		接触経験の少ないNS	
	対上級場面	対初中級場面	対上級場面	対初中級場面
総発話数	1114	1018	934	975
「先取り発話」の生起数	77	70	24	49
「先取り発話」の生起率	6.9%	6.9%	2.6%	5.0%

3.2 「先取り発話」の「情報の帰属」について

次に、主な情報の担い手としてNSが情報を提供する本調査において、NSがどのように「先取り発話」を使用しているか明らかにするために、NSによる「先取り発話」を「情報の帰属」の視点から分類する。まず、「先取り発話」が情報を含んでいるかどうかによって、「A. 実質的な情報無し」と「B. 実質的な情報あり」という2つに分類した。次に、「B. 実質的な情報あり」を、先取りする情報の帰属によって、「①先行話者に帰属する情報」、「②後行話者に帰属する情報」、「③共有情報及び一般知識」の3つに分類した。以下、3.2.1で「A. 実質的な情報無し」について、3.2.2で「B-①先行話者に帰属する情報」、3.2.3で「B-②後行話者に帰属する情報」、3.2.4で「B-③共有情報及び一般知識」について述べる。

3.2.1 「A. 実質的な情報無し」

表2は、「A. 実質的な情報無し」の「先取り発話」の生起数を示したものである。

この結果について、「接触経験(2水準)×場面(2水準)」の2要因分散分析を行ったところ、接触経験と場面の主効果も交互作用も確認できなかった(接触経験の主効果： $F(1, 14) = 0.061, p = 0.8087$, 場面の主効果： $F(1, 14) = 1.167, p = 0.2983$, 交互作用： $F(1, 14) = 1.167, p = 0.2983$). つまり、「A. 実質的な情報無し」の使用に、NSの接触経験と場面による有意差が見られないことが分かった。

表2 「A. 実質的な情報無し」の「先取り発話」の生起数

	対上級場面	対初中級場面	合計
接触経験の多いNS	10	6	16
接触経験の少ないNS	7	7	14
計	17	13	30

3.2.2 「B. 実質的な情報あり」：①先行話者に帰属する情報

表3は、「B-①先行話者に帰属する情報」の「先取り発話」の生起数を示したものである。

この結果について、「接触経験(2水準)×場面(2水準)」の2要因分散分析を行ったところ、場面の主効果は確認できた($F(1, 14) = 5.376, p < .05$)が、接触経験の主効果や接触経験と場面の交互作用は確認できなかった(接触経験の主効果： $F(1, 14) = 3.606, p = 0.0784$, 交互作用： $F(1, 14) = 0.336, p = 0.5714$). つまり、「B-①先行話者に帰属する情報」の使用には、場面による有意差があり、接触経験の多いNSも少ないNSも、対初中級場面の方が「B-①先行話者に帰属する情報」を有意に多く用いることが分かった。以下では、接触経験の多いNSも少ないNSも「先取り発話」を有意に多く用いる対初中級場面の談話例を観察する。

表3 「B-①先行話者に帰属する情報」の「先取り発話」の生起数

	対上級場面	対初中級場面	合計
接触経験の多いNS	18	33	51
接触経験の少ないNS	9	18	27
計	27	51	78

例1 接触経験の少ないNSN5と初中級NNSjの会話

→131-1 NNSj]] <山> {> } とかー、あ、う、自然を見ること、みずーみずくしつ> {< } , ,
 ⇒132 NSN5 <湖?> {> } .
 131-2 NNSj 湖.

例1では、NNSjがNSN5に自然のあるところへ行きたいという話をしている。NSN5は、NNSjの131-1「山とか」、「自然を見ること」という既出情報によって、NNSjの行きたい場所を察知し、132「湖?」と先取りして確認要求をしている。ここでは、NNSの先取り発話131-1の中に、音の引き延ばしやフィラーなどの明確な「発話遂行滞り」が現れている。NSの132「湖?」という「先取り発話」は、NSがNNSの発話遂行困難を察知し、それを助けるために、NNSの言おうとしていることを質問形式で聞き返す「助け舟」と捉えられる。このような「発話の滞り」のあとに「助け舟」として行われた「先取り発話」は、18例中17例であった。

例2 接触経験の多いNSE5と初中級NNSiの会話

→178-1 NNSi あ、前、別科と一緒に<別科生と一緒に> {< } , ,

⇒179 NSE5 くあつ着ました?> {>}.

178-2 NNSi 着たことがあります。

例2では、NSE5が「浅草では着物を着て中に入れる」ことを説明している。NSE5は、「NNSiが以前別科生と浅草に行ったことがある」という情報に基づき、NNSiが178-1「あつ、前、別科と一緒に」と言ったところで「別科生と一緒に着物を着たことがある」というNNSiの出来事を察知し、179「あつ着ました?」と先取りして確認要求をしている。それに対してNNSiが178-2「着たことがあります」と承認している。NNSの先行発話178-1の中には「発話遂行滞り」が現れておらず、NSの179「あつ着ました?」という「先取り発話」は、NSがNNSの言いたいことを察知した時点で直ちに行われた「共同発話」と言える。このような「発話の滞り」のないところで行われた「先取り発話」は、33例中18例であった。

3.2.3 「B. 実質的な情報あり」：②後行話者に帰属する情報

表4は、「B-②後行話者に帰属する情報」の「先取り発話」の生起数を示したものである。

この結果について、「接触経験(2水準)×場面(2水準)」の2要因分散分析を行ったところ、接触経験と場面の交互作用が見られた($F(1, 14) = 8.060, p < .05$)。単純主効果を検討したところ、接触経験の多いNSは、場面による有意差が認められなかったが($F(1, 14) = 0.502, p = 0.4903$)、接触経験の少ないNSは、場面による有意差が認められた($F(1, 14) = 10.932, p < .01$)。つまり、「B-②後行話者に帰属する情報」の使用について、接触経験の少ないNSは、対話相手の日本語能力が上がると少なくなるのに対して、接触経験の多いNSは、対話相手の日本語能力に関わりなく使用することが分かった。以下では、NSの接触経験によって有意差が見られた対上級場面に注目して談話例を観察する。

表4 「B-②後行話者に帰属する情報」の「先取り発話」の生起数

	対上級場面	対初中級場面	合計
接触経験の多いNS	19	16	35
接触経験の少ないNS	4	18	22
計	23	34	57

例3 接触経験の多いNSE2と上級NNSCの会話

⇒193 NNSC では制服はまだ 【

⇒194 NSE2 】いやなんかね、お母さんがね、人にあげちゃったんだよね

195 NNSC えー、いやー<笑い>。

例3では、NNSCがNSE2に高校の制服について質問している。NSE2は、NNSCの193「では制服はまだ」の副詞「まだ」によって、NNSCが「高校の制服はまだうちにありますか」と質問しようとしていることを察知し、194で直ちに「いやなんかね」と否定の応答をしてから、「お母さんが人にあげちゃったからない」と先取りして答えた。NNSの193の先行発話の中には、明確な「発話遂行滞り」が現れておらず、NSの194の「先取り発話」は、NSがNNSの聞きたいことを察知し、NNSに直ちに情報を提供するものと言える。このような「発話の滞り」のないところで行われた「先取り発話」は、19例中16例であった。

例4 接触経験の少ないNSN3と上級NNSFの会話

⇒76-1 NNSF もうー、ここ、あのう、行けばいつの、あのう、季節?、,

77 NSN3 はい。

⇒76-2 NNSF どんな季節に(ああ)、あのう、行けばいい?。

⇒78-1 NSN3 えっと、おすすめは春、

79 NNSF 春。

⇒78-2 NSN3 が=。

例4では、NNSFが江ノ島に行くのにいい季節を尋ねている。NNSFが76-1と76-2で江ノ島へ行くのに最適な季節を質問している。それに対してNSN3は、78-1、78-2で「えっと、おすすめは春/が」と答え、自分の持つ情報を提供している。このように、接触経験の少ないNSは、自分が持つ情報に関してNNSから質問されても「先取り発話」を使用せず、「質問-応答」の発話連鎖の中で、自分の持つ情報を相手のNNSに提供している様子が多く観察された。また、対上級場面で接触経験の少ないNSが行った4例の「先取り発話」のすべては、NNSの「発話の滞り」のあとに「助け舟」として行われたものであった。

3.2.4 「B. 実質的な情報あり」：③共有情報及び一般知識

表5は、「B-③共有情報及び一般知識」の「先取り発話」の生起数を示したものである。

この結果について、「接触経験(2水準)×場面(2水準)」の2要因分散分析を行ったところ、接触経験の主効果が見られた($F(1, 14) = 7.476, p < .05$)が、場面の主効果や交互作用は認められなかった(場面の主効果： $F(1, 14) = 1.189, p = 0.2940$, 交互作用： $F(1, 14)$)

表5 「B-③共有情報及び一般知識」の「先取り発話」の生起数

	対上級場面	対初中級場面	合計
接触経験の多いNS	30	15	45
接触経験の少ないNS	4	6	10
計	34	21	55

=2.033, $p=0.1758$). つまり, NS による「B-③共有情報及び一般知識」の使用には, NS の接触経験による有意差が認められ, 両場面において接触経験の多い NS のほうが「B-③共有情報及び一般知識」を有意に多く使用し, 生起数の合計には大きな差があることが分かった. 以下では, 接触経験の多い NS の談話例を取り上げ, 観察する.

例5 接触経験の多いNSE7と初中級NNSmの会話

- 208-1 NNSm 漢字が良くないので,
 209 NSE7 ああ確かに<笑>.
 →208-2 NNSm それで, うーん, ここで **【**
 ⇒210 NSE7 **】** うん, 結んで.
 211 NNSm うん, はいはいはい.

例5では, NNSmがNSE7に浅草寺で引いたおみくじについて話している. NSE7は, NNSmの208-1「漢字が良くないので」によって, NNSmが凶のおみくじを引いたと予測し, 「凶のおみくじを引いた時には, 神社に結んで帰る」という一般知識に基づき, NNSmが208-2「それで, うーん, ここで」と言ったところで, 210「うん, 結んで」と先取りしている. ここでは, NSの先行発話208-1, 208-2の中には明確な「発話遂行滞り」が現れておらず, NSの210「うん, 結んで」という「先取り発話」は, NSがNNSの言いたいことを察知した時点で直ちに行われた「共同発話」と言える. 接触経験の多いNSの対初中級場面では, このような「発話の滞り」のないところで行われた「先取り発話」は, 15例中10例であった.

例6 接触経験の多いNSE1と上級NNSAの会話

- 132-1 NNSA じゃあ, そうすると, まず浅草寺に行くって <く>, ,
 ⇒133 NSE1 <く> <く> [声を大きくして].
 →132-2 NNSA 終わってから **【**
 ⇒134 NSE1 **】** 浅草寺, 仲見世通ってって, あのう, お参りするところがあるから(うん), そこで見てって…
 →135 NNSA うん, で, もし, まあ余裕がくあれば <く>.
 ⇒136 NSE1 <あれば> <く> [声を大きくして].
 →137 NNSA また, こう, 東京<スカイツリーとか> <く> **【**
 ⇒138 NSE1 **】** <スカイツリー> <く> 行って… [声を大きくして].
 139 NNSA うん.

例6では, NNSAがNSE1に紹介してきた浅草の遊び方をまとめている. NSE1は, 会話の中で共有した情報に基づき, NNSAが先行発話132-1, 132-2, 135, 137を完結する前に, 133, 134, 136, 138で先取りをして情報を補っている. NNSAの先行発話の中にはどれも明確な「発話遂行滞り」が現れておらず, NSE1の「先取り発話」によって「共同発話」の連鎖が成立している. 接触経験の多いNSの対上級場面では, このような「共同発話」による発話連鎖も観察された. さらに, 対上級場面では, このような「発話の滞り」のないところで行われた「先取り発話」は, 30例中18例であった.

4. まとめと今後の課題

本研究では, 接触場面における一般のNSによる「先取り発話」に注目して調査した. その結果, 接触経験の少ないNSは, 接触経験の多いNSより「先取り発話」が少なく, NNSの発話が滞った場合に「助け舟」としての「先取り発話」を用いるため, 対初中級場面の方が多くなることが分かった. 一方, 接触経験の多いNSは, 両場面ともに「先取り発話」を積極的に用い, 相手の発話が滞っていない場合でも相手の言いたいことや聞きたいことを文脈上の手がかりから予測し, 相手と自分の情報や共有された情報, あるいは一般知識を活用して, 「共同発話」を成立させることが分かった. NSは, NNSとの接触経験を積むことによって, 相手の発話に耳を傾け, 積極的に予測し, 先取りすることによって, NNSとの協働的な会話構築を心掛けるようになったと考えられる. つまり, NSは, 日常的なNNSとの接触経験によって, コミュニケーションにおける「聞き手としての積極的な役割」を学習していることが推測される. 今後は, NNSの母語を統一し, 被験者数を増やすことによって, 日常的なNNSとの接触経験がNSのフォリナー・トークに与える影響を解明することを課題とする.

参考文献

- 木林理恵(2011). 日本語の母語場面と接触場面における共同発話文の総合的研究—ディスコース・ポライトネス理論の観点から— 東京外国語大学博士論文
 笹川洋子(2020). おしゃべりなポライトネス—会話の中の共話・話題交換・笑い・メタファー— 春風社
 堀口純子(1997). 日本語教育と会話分析 くろしお出版
 柳田直美(2015). 接触場面における母語話者のコミュニケーション方略—情報やりとり方略の学習に着目して— ココ出版